

豊明希望チャペル礼拝

2025/6/22

「失望させられない」

ローマ人への手紙 10 : 11～13

羽鳥明と、舟喜順一という先生についてお話しさせて下さい。

東京にある聖書宣教会の元校長であった舟喜信先生は、舟喜順一先生の弟さんですね。牧師を育てる神学校、聖書宣教会は、この舟喜順一先生と、自由が丘キリスト教



会の前牧師の羽鳥純二先生のお兄さんである羽鳥明先生と、宣教師ドナルドホーク師が創立者(1958年5月)とされている神学校です。

(←羽鳥明師：右 & 舟喜順一師：左)

羽鳥一家と、舟喜一家は、日本のキリスト教の歴史の中にあって、大きな影響を与えたご一族であられると思います。(例えば・・・舟喜信先生が KGK、太平洋放送協会を羽鳥明先生が、草創期に関わられた・・・)

今日お話しする舟喜順一先生と、その羽鳥明先生は、同じ旧制中学校の同級生でした。人間を賛美するわけではありませんが、やはり、このお二人が同級生であったことに、何か、神さまの配剤や、選びを感じさせられるのです・・・

とりわけ、お二人の関わりについては、何より、羽鳥明先生を教会に誘ったのが、中学(今の高校)の同級生の、舟喜順一先生だったということです。

そのきっかけについては、こんなことが語られます。時は、1936年、日本は、軍国主義の時代に入ろうとしていた時代でした。同窓生であった旧制前橋高等学校(高崎中学?)の時代、学校の先生が、「このなかで、まさか、売国奴のようなキリシタンはいないだろうな」と言うと、一人、「はい、わたしはクリスチャンです。」と堂々と云っ



た人物がいました。それが、舟喜順一という学生でした。その姿に圧倒されて、今の JECA 前橋キリスト教会に通うようになり、後に、羽鳥明も、舟喜順一と同じクリスチャンとなります。この舟喜順一先生の経歴は、それを聞くだけで圧倒されますが・・・(一応、紹介すると)「東京帝国大学文学部に入学するも、教授がイエス・キリストとキリスト教を非難したため自主退学します。それで翌年、京都帝国大学文学部に入学し、1943年(昭和18年)12月、学徒出陣で、志願して、陸軍少尉に任官されインパール作戦に参加します。その時、イギリス軍の捕虜になり、通訳を務めたのち復員します。1949年にアメリカの神学校を卒業して、1955年「みことばの光」の創刊、聖書宣教会の創立などに関わられました。たくさんの本も書いておられます。すごい時代でしたね。

もう一人の、羽鳥明先生が、この舟喜順一先生に導かれ、はじめて教会に行った時のことを、こう言われています。その時のテープのメッセージの内容は、有名なもので、このようにカセットテープになって、たくさんの人が聞き、クリスチャンになり、牧師になったのだと思います。他にもない、私も、神学校に行った頃、このテープを聴いて大きな影響を受けた一人です。これは、2006年のラジオ『世の光』(2006.8.23)のメッセージですが・・・こんな話しをされました。

「世の光の時間です。お元気でしょうか。羽鳥明です。新約聖書ローマ人への手紙



10章13節にこんなことばがあります(今日の箇所です・・・)。「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」。私が16歳の時に、今から70年前の4月の晩、群馬県前橋の畳敷きの教会で、バーネット先生(M.A. バーネット)というおばあさんの宣教師が私に読み聞かせた聖書のことばです。これは旧約聖書ヨエル書2章32節で言われたことばの引用です。「**だれでも**」と言っていますね。**本当に誰でもです**。何も知らない、何も分かっていない人でもです。きたない心を持った人、いろいろ罪を犯した人もです。私は聖書を持っていず、聖書のことばは初めてでした。教会も初めてで、讃美歌も祈りも初めて。何も知らない、良く分かって

いない、そういう人間でした。その晩の説教を聞いて自分が心の真っ黒な罪人、何一つ良いことをしたことがないと初めて知りました。バーネット先生は、「誰でも救われる」と言われました。「羽鳥さん、あなたもです。主とは、あなたの罪の身代わりに死んでくださったキリスト様のことです。キリスト様信じます、救ってください、と祈りさえすればいいのです。」ふと目を上げてバーネット先生を見上げると、その大きな眼(まなこ)からポタリポタリと涙がこぼれ落ちていました。私はびっくりしてドカンと心を打たれました。バーネット先生に頼んで祈りを教えていただきました。口移しに私は祈って主の御名を呼び求めたのです。バーネット先生はしっかり私の手を握って、「羽鳥さん、あなたは救われました。今からは神の子です。これから教会に来て、しっかり聖書を読み、みなさんと祈ってください。そうしたら分かるようになりますよ。」その晩、家に帰る時に私は大きな声で習いたての讚美歌を歌っていました。「神様、キリスト様、これからはあなたのために生きればいいのですね。」と言っていました。それから 70 年、救われっぱなし(面白い言い方です・・)で来ました。

パウロが、ローマの人々に語った今日の箇所 13 節を、あらためて読みます。

「10:13 「主の御名を呼び求める者はみな救われる」のです。」

羽鳥先生はそのとき、バーネット宣教師と共に祈ったときのことをこう語ります。

「口移しに私は祈って主の御名を呼び求めたのです。バーネット先生はしっかり私の手を握って、「羽鳥さん、あなたは救われました。今からは神の子です。これから教会に来て、しっかり聖書を読み、みなさんと祈ってください。そうしたら分かるようになりますよ。」・・(「呼び求めるだけで救われる・・そうしたら分かるようになる」)それから 70 年、たしかに「呼び求めるだけで」救われ、救われっぱなしで来ましたと言うのです。そんな、呼び求めるだけでいいのか？何か修行でもする必要があるのではないか。そもそも、私のような罪深くうたがい深い人間が救われるのか。いいえ、呼び求めるだけで救われると。旧約聖書のヨエル書で約束されたと、羽鳥先生が言われましたが、今、私たちが第一週に教えられている使徒の働きで、ペンテコステ（今年は、6/8・・）で、再度確認された言葉でした。

使徒の働き「2:21 しかし、主の御名を呼び求める者はみな救われる。』

旧約の書かれた、この約束は、イエス様が約束の助け主を送ると言われたペンテコステの時に、再確認され、そして、パウロの言葉によって、あらためて、確認されたように、少し大げさに言えば、「主の御名を呼び求める者はみな救われる」は、13 節で、「付きの引用として語られますが、初代教会において共通したクリスチャンの確信であり、合言葉でした。この聖句、約束を頼りに、人々は救われ、教会が形成されていったのです。当時のクリスチャンは、みんなこの約束の言葉を知っている。新しい人が教会に入ってきて、そこのクリスチャンの誰に聞いてもその人に言うのです。「ええ、主の名を呼ぶ者は、だれでも救われる」そのとおりですと。そんな合言葉というか、約束の言葉だったのではないのでしょうか。この御言葉を含めて、今日の箇所全体の、11 節から 13 節まで読みます。

「10:11 聖書はこう言っています。「この方に信頼する者は、だれも失望させられることがない。」10:12 ユダヤ人とギリシア人の区別はありません。同じ主がすべての人

の主であり、ご自分を呼び求めるすべての人に豊かに恵みをお与えになるからです。
10:13 「主の御名を呼び求める者はみな救われる」のです。」

それで、あらためて、この13節ですが、パウロは、このヨエル書のことばを、そして、使徒の働きを引用しましたが、特に、使徒の働きのこの箇所、その前後関係から見ますに、この約束は、終末的な言い方、この世の終わりを示している聖句だと言うことです。その「終末的」という意味は、救いよりも、むしろ、裁きの聖句だと言うことです。使徒の働きを、その前の節から読みます。使徒「2:20 主の大いなる輝かしい日が来る前に、太陽は闇に、月は血に変わる。2:21 しかし、主の御名を呼び求める者はみな救われる。』」

太陽も月もの役割を終える終わりの時代という意味です。まあ、不吉な預言だと言うことです。また、別の言い方をすれば、この「2:21 しかし、主の名を呼ぶ者は、みな救われる。』」との預言、約束は、危急(危急(意味) : 危険な事態が目の前に迫っていること)の、意味の預言だと言うことです。

しかし、キリストの名を呼ぶなら、誰でも救われると改めて言うのです。ギリシャ人でも、ユダヤ人でも、日本人であろうと、アメリカ人であろうと、例外はない。救



われる。しかし、キリストの名以外では、日本人も中国人も、ユダヤ人も、誰も決して、救われないという意味でもあるということです。

ある人がこういう例で説明しました。ここで言われている約束、救いは、「有効期限がある救い」だと。どういう意味でしょうか・・・実は、この宝くじ、毎年当選しながら取りに来る人がいないために、宙に浮いたままの宝くじ懸賞金が、20億円以上もあるのだと聞いた事があります。それで宝くじ協会は時々広告をうって「家の中に眠っている宝くじを確認して下さい！」と呼びかけるそうです。どうして呼びかけるんでしょう。引き換えには有効期限があるからです。それで、キリストによる救いも同じだということです。あなたが生きている間、あるいは、明日来るかも知れないイエス

様の再臨、この世の終わりまで、その期限付きの約束だと言うことです。「この 13 節の約束は、期限付きです。どうぞ今キリストを受け入れ、永遠の命を受け取ってください。」と、その人は言うのです。

私は、羽鳥先生が、声を震わせながら語る、そのテープを聞いて、感動の涙を禁じ得なかったのですが、羽鳥先生を泣かせ、またバーネット先生がながした涙は、ひとりの滅びいく人、地獄に行ってしまう事への同情の涙であり、しかし、なんとか助けたいという、そして、更に言えば、私は助けられたという、喜びの涙であったことを思うのです。

もう一度、その箇所を読みます。

「10:13 「主の御名を呼び求める者はみな救われる」のです。」

「主の御名」とは、主、すなわち、キリストであって、その御名とは、キリストであります。キリスト教はむつかしくありません。とにかく、キリストという言葉を知って、その名前で祈る、あるいは、その方に向かって祈れば、誰でも救われる宗教なのです。初代教会の時代、まさに、その教会は、「主の名を呼ぶ者は、だれでも救われる」教会だったのです。もちろん、今も、この豊明希望チャペルの教会もです。

ある方がこのように証しされました。

『「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のです。』私は、この「誰でも」という言葉がとっても好きなんです。私は小さい頃から落ちこぼれの子供でありまして、そのことで本当に辛い思いを何度も経験してきました。私は小さい頃、本当にグズで、のろまで、何をやっても駄目な子供でありました。そのことで恥ずかしい思いをしたり、仲間はずれにされたり、本当に辛い子供時代を過ごしてきました。そして、そのことが私の一つのトラウマになっていて、そのために私は他の人以上に、この「誰でも救われる」という言葉に敏感に反応するのかもしれない。けれども、この言葉は、どんなに強調しても、強調し過ぎることはない、と私は思います。この「誰でも」という言葉は、人間の存在価値はみんな同じである、という意味の言葉です。主の名を呼び求める人の中で、真面目な人だけが救われるとか、信仰深い人だけが救われるとか、そういうことではない。主の名を呼び求める者は「誰でも」救われるのであります。』

パウロは言います。なぜ、そんなに、キリストを呼ぶ人が全部救われるのか。それは、「**主がすべての人の主であり、ご自分を呼び求めるすべての人に豊かに恵みをお与えになるからです。**」いわば、教会で聞いたんですけど、聖書でそう言うのを呼んだのですけど、そんな風に思って、神を、主を呼ぶと、主が、「私のこと呼んだ？」と喜んでくださり、いいよ、私に出来ると思ってたよって来てくれたら、全員、「すべての人に」「豊に」恵みを与える。それが、神さま、イエス様だとパウロは言うのです。

今日、あらためて、キリストに求めるなら誰もが救われる、この、興奮すべき、歓喜すべき、わたしたちは、この福音を聞きました。

この週。「**主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる**」その御名、イエス・キリスト。「**ご自分を呼び求めるすべての人に豊かに恵みをお与えになる**」すでに救われ、恵みが日々与えられているクリスチャンも、この希望の名、イエス・キリストとの名

を叫びながら、仰ぎながら、歩む、そして祈る、あの人の救いを祈る、そんな、証の
あゆみを歩む、この週でありたいと願います。